



特260
687

高野物狂

昭和改訂版
外五

始



高野物狂

(梗概) 常陸の國平松氏の幼主春満は、去年秋父を失ひより世を果敢
 なみ、遁せりて行方しらすなりたり、家臣高師の四郎幼主をも失ひた
 る悲しみの爲め遂に物狂ひとなり、主君の残り給へる文を抱きて放下
 の姿のまゝ紀伊國高野山に到りぬ。折から此山に入りて出家せる春満
 は其師僧と共に三鈴の松に出で、ありしが、偶この物狂に出會ひ、師
 僧と物狂の間に様々面白き問答ある間に、其の狂人こそ旧臣高師の四
 郎なる事を知り從互に其の邂逅を喜び、尚ほ高師の四郎もここにて出
 家し主君諸共佛に仕ふる身となりぬ。



と申して法王子の位を授け奉りて
又當山に於て觀音寺と申す所
平松殿の法位牌を建立申して今
日ハ命下日にて法王子の位を授け奉りて
香せざるやと存候上 又法王子の位を授け奉りて
名法也今在西方名法陀女婆示現觀

世音三世利益同一解 實は難き也 此願
を成す 慈眼を以て生戀く ちり
首を以て此願の目撃ある世に於ては
世に於ては 難むる事 何事
海及此世に於ては 申す所 先にお好む事
見らるる事 上 申す所 人等を

母を頼るるふりくちりさまで別る
事乳ふたを出一父母よ一度わら
心地しつらあはれし我惜うしつかま
しく尋ねあまよふ年の内よ必く
身の行儀をいそせしんあはれ
名残りう惜うしつらあはれし我惜うしつかま

さるる世をい出る名残の神を清らりと
遊下されたるは業乃あまの花を先
言て身の成果はらうあはれん上恨めし
此の事やキヤア一 恨世を控はれふともこ
世此乃の末あはれ何國をも清けな
とや伴ひ給ぬぞ今ヤラハあはれはれむ

しきくねひよらん^{ヤア} 立の布る雲路
の^ウ愛の何國言誓山よ^{ヤア} 来てこれ
をたうとや^{ヤア} あるひ念仏稱名此^{ヤア}
くあるひ危鐘まいの^{ヤア} 身よそこ
心^{ヤア} 澄く^{ヤア} 物^{ヤア} ね^{ヤア} ひの^{ヤア} ね^{ヤア} ひ^{ヤア} さ^{ヤア} む^{ヤア} る^{ヤア} 心^{ヤア} なる^{ヤア}
い^{ヤア} の^{ヤア} ね^{ヤア} く^{ヤア} 為^{ヤア} ぬ^{ヤア} る^{ヤア} 人^{ヤア} を^{ヤア} 乃^{ヤア} 世^{ヤア} の^{ヤア} 使^{ヤア}

の様おあ^{ヤア} ぶ^{ヤア} な^{ヤア} どり^{ヤア} の^{ヤア} 君^{ヤア} 子^{ヤア} 承^{ヤア} せ^{ヤア} さん
と^{ヤア} 無^{ヤア} 子^{ヤア} 祈^{ヤア} 念^{ヤア} して^{ヤア} 二^{ヤア} 結^{ヤア} の^{ヤア} ね^{ヤア} 此^{ヤア} 本^{ヤア} 心^{ヤア} 承^{ヤア} せ^{ヤア}
て^{ヤア} 休^{ヤア} ま^{ヤア} ん^{ヤア} 風^{ヤア} 立^{ヤア} 寄^{ヤア} せて^{ヤア} 休^{ヤア} ま^{ヤア} ん^{ヤア} ふう^{ヤア} せ^{ヤア}
や^{ヤア} る^{ヤア} 海^{ヤア} を^{ヤア} 此^{ヤア} れ^{ヤア} が^{ヤア} 異^{ヤア} 形^{ヤア} 成^{ヤア} る^{ヤア} 様^{ヤア} そ^{ヤア} も^{ヤア} い^{ヤア} づ^{ヤア} く
よ^{ヤア} る^{ヤア} 事^{ヤア} 承^{ヤア} ぬ^{ヤア} る^{ヤア} 人^{ヤア} 乃^{ヤア} 実^{ヤア} よ^{ヤア} く^{ヤア} 以^{ヤア} 後^{ヤア} せ^{ヤア} せ^{ヤア} せ^{ヤア}
て^{ヤア} 此^{ヤア} 物^{ヤア} 是^{ヤア} を^{ヤア} 敢^{ヤア} 下^{ヤア} に^{ヤア} ぐ^{ヤア} け^{ヤア} 弁^{ヤア} を^{ヤア} う^{ヤア} た^{ヤア} 心^{ヤア}

敵^{ホウ}増^{ラツ}一たる物^ホねふく^ホく^ホはよ^ホ ^ホた^ホ振^ホ出^ホる

物^ホねる^ホふ^ホは^ホ言^ホの^ホ中^ホの^ホ内^ホの^ホ事^ホを^ホ言^ホふ^ホま^ホす

人^ホを^ホと^ホら^ホめ^ホい^ホま^ホい^ホぬ^ホい^ホぬ^ホふ^ホか^ホい^ホし^ホし^ホ出^ホゆ^ホく

是^ホを^ホ利^ホ益^ホを^ホも^ホる^ホに^ホ依^ホり^ホて^ホ人^ホを^ホ説^ホく^ホは

山^ホよ^ホま^ホる^ホ戒^ホに^ホ依^ホり^ホて^ホ人^ホを^ホ説^ホく^ホは

為^ホす^ホと^ホい^ホふ^ホ又^ホう^ホは^ホ結^ホ戒^ホ清^ホ浄^ホの^ホ地^ホよ^ホ入^ホり

定^ホむ^ホる^ホ言^ホの^ホ中^ホの^ホ内^ホの^ホ事^ホを^ホ言^ホふ^ホま^ホす

是^ホを^ホ利^ホ益^ホを^ホも^ホる^ホに^ホ依^ホり^ホて^ホ人^ホを^ホ説^ホく^ホは

山^ホよ^ホま^ホる^ホ戒^ホに^ホ依^ホり^ホて^ホ人^ホを^ホ説^ホく^ホは

為^ホす^ホと^ホい^ホふ^ホ又^ホう^ホは^ホ結^ホ戒^ホ清^ホ浄^ホの^ホ地^ホよ^ホ入^ホり

此^ホ内^ホよ^ホて^ホ入^ホ言^ホま^ホる^ホと^ホい^ホふ^ホま^ホす

得^ホ多^ホき^ホ詞^ホを^ホい^ホふ^ホん^ホ去^ホる^ホり^ホか^ホく^ホ世^ホを^ホ説^ホく^ホは

入定ねる高聖の奥 あまの 今^マは山^{アタリ}の月^{アタリ}の下

昔^{ニ人}はつこの^薩の^堪めん^因あう^明をさづくり^{アタリ}慈を乃

下生を待^{アタリ}候ふ^{アタリ}り人^{アタリ}仏^{アタリ}不^{アタリ}この^{アタリ}妙^{アタリ}祥^{アタリ}あり

大師^{目上}の^{アタリ}結^{アタリ}ぬ^{アタリ}ふ^{アタリ}の^{アタリ}慈^{アタリ}尊^{アタリ}の^{アタリ}会^{アタリ}此^{アタリ}曉^{アタリ}家^{アタリ}を^{アタリ}三

世^{アタリ}乃^{アタリ}は^{アタリ}君^{アタリ}を^{アタリ}君^{アタリ}る^{アタリ}け^{アタリ}言^{アタリ}世^{アタリ}は^{アタリ}も^{アタリ}来^{アタリ}り

押^{上リ}け^{アタリ}高^{アタリ}聖^{アタリ}山^{アタリ}と^{アタリ}申^{アタリ}ハ^{アタリ}帝^{アタリ}城^{アタリ}を^{アタリ}志^{アタリ}す^{アタリ}二^{アタリ}百

里^{アタリ}田^{アタリ}里^{アタリ}を^{アタリ}懸^{アタリ}ま^{アタリ}す^{アタリ}く^{アタリ}無^{アタリ}人^{アタリ}有^{アタリ} 本 然^上る^{アタリ}ふ

末^{アタリ}世^{アタリ}此^{アタリ}隠^{アタリ}所^{アタリ}と^{アタリ}して^{アタリ}結^{アタリ}束^{アタリ}清^{アタリ}淨^{アタリ}乃^{アタリ}乃^{アタリ}場

たり 日 申^{アタリ}ふ^{アタリ}も^{アタリ}は^{アタリ}二^{アタリ}指^{アタリ}れ^{アタリ}ね^{アタリ}ハ^{アタリ}大^{アタリ}同^{アタリ}二^{アタリ}年^{アタリ}の

由^{アタリ}復^{アタリ}射^{アタリ}菜^{アタリ}の^{アタリ}に^{アタリ}我^{アタリ}法^{アタリ}成^{アタリ}終^{アタリ}象^{アタリ}海^{アタリ}の^{アタリ}地^{アタリ}乃^{アタリ}志^{アタリ}居

一^{アタリ}に^{アタリ}糸^{アタリ}の^{アタリ}を^{アタリ}投^{アタリ}す^{アタリ}世^{アタリ}終

ひ^{アタリ}一^{アタリ}は^{アタリ}先^{アタリ}と^{アタリ}す^{アタリ}ふ^{アタリ}飛^{アタリ}鳥^{アタリ}あり^{アタリ}け^{アタリ}ね^{アタリ}ぐ^{アタリ}え^{アタリ}此^{アタリ}精^{アタリ}ふ

せままる 然れば遠く北中かよひたしく
 ねもととほるを例 子代万代の来り事して
 久しうれとの四方便妻しく日記に
 書きつりおやさればまや生か平等の松風
 ち八葉北窓を静ふ吹渡り法性縁
 乃月の影も八北谷に曇るはして誠よ三

云の曉を待如く也然まき昂身成仏の
 相浅歌し入定北地浅海しつ志んく
 たる奥の院古山鳥乃ありさびて飛む
 落葉北風風を無常観念北粒ひき
 迎も又た任の皆令併乃縁えの相浅
 あり給ふ上然れば時移り事志や

して
 言る此四席 何事も誠り はんび上 二世
 乃契朽せよ 是は為記の必や 吾輩の
 此影形むら 君小お進ぞ 嬉しき 本より 誠
 の粗氣あ 君の為なれ ば 斬て 誓 押
 切て 濃墨 漆よ 身をおつ 一 君と 同
 権人の 心 中 志 実 主 従 此 乃 とう や く

著

十二

昭和十年二月十五日印刷
昭和十年二月二十日發行

定價金五拾錢

著者權所有

著作者 寶生新

東京市下谷區上根岸町八十二番地

發行兼印刷者 江島伊兵衛

發行所 下掛寶生流謄本刊行會

終

